

第Ⅱ部

環境づくりの実践編

02

- 2章 発達障害の可能性のある子どもにとってわかりやすい学級環境をつくろう
- 3章 発達障害の可能性のある子どもにとってわかりやすい園環境をつくろう
- 4章 どの子どものニーズもしっかりキャッチしよう
(先生に求められるもの=配慮事項)



第2部では、子どもを取り囲む生活環境づくりと、学級（集団）づくりについて掲載しました。

＜発達障害の可能性のある子どもにとってわかりやすい環境をつくることは、どの子どもにもわかりやすい環境となる＞という視点から、アプローチした環境づくりがわかります。

先生が、その都度指示を出したり、気になる行動に対して注意が多くなったりしては、子どもたちは、見通しをもって落ち着いて生活することはできません。

小さな自信を持ちながら、主体的に生活していく子どもたちを育てるために、整った生活環境をどのようにつくっていけばよいか、そのためのポイントを整理しました。

通常の学級における特別支援教育は、まずは、良質な学級経営・園経営が基盤といってもよいでしょう。



Q24 ~ Q26

Q24 子ども個々とよりよい関係を結ぶためには、どのようにしたらよいですか。

Q25 集団づくりを進めていくためには、どのようにしたらよいですか。

Q26 学級経営をチームで進めていくためには、どのようにしたらよいですか。

Q24 子ども個々とよりよい関係を結ぶためには、どのようにしたらよいですか。

どんなに力のある先生であっても、家にいる時と同じように、自分だけの事情で、母親に対するのと同じ感覚で先生と1対1の関係を求めてくる子どもがいては、クラスづくりは難しいです。

「幼稚園・保育所は、家とは違い、先生はクラスみんなの先生で、A君、B君のためだけの大人ではない」ことを日々のかかわりの中で教えていく取組がまず必要になります。

一人の子どもに耳を傾けすぎるかかわりを繰り返していると、先生が全員にかかわって取組を進めている時でも、「自分の事情で直接かかわっていいのだ」と誤学習をしてしまいます。子どもが1対1のかかわりを求めてきた時には、どのような場面でどう対応するのか、整理をしておく必要があります。

先生が忙しく動き回り一人一人に対応し続ける、刺激過多のせわしないクラスは、発達障害のある子どもにとっては、刺激に振り回させるため、つらい環境でもあります。その後の対人関係スキルを学ぶ際にも、マイナス要因になります。そのため、クラスに居続けることが困難になり、教室から飛び出してしまうことも予想されます。

本来、集団で頑張れるはずだった子どもを、支援員がつかなければクラスに戻れない子どもにしてしまわないようにしたいものです。先生にまわりつく子どもから、活動を楽しむ子どもへとしたいものです。



実践のポイント

- ① 先生は、「クラスみんなの先生」という意識を徹底させていく。
- ② 個々の子どもにかかわりすぎて、集団を待たせてしまう状況をつくらない。
- ③ 個々の子どもにかかわる際は、ぶれることのない一貫した方針を立てる。
- ④ 困った時に、先生にSOSを出せばよいと子どもに思ってもらえる関係をつくる。

Q25 集団づくりを進めていく上で、配慮することはどのようなことですか。

発達障害のある子どもは、たくさんの刺激や情報を整理することが苦手です。にぎやかすぎない整った環境づくりを目指したいものです。

実践のポイント

- ① クラスの環境をすっきりさせる。
- ② 先生から子どもに向けて出す「指示」をすっきりさせる。
- ③ 必要のない視覚刺激はカバー等でしっかり覆う。
- ④ 先生の出す情報は必ずわかるという成功体験を子どもに繰り返えさせる。

また、発達障害のある子どもは、着席したものの、すぐに席を離れてしまったり、なかなか集まってくれなかったりすることがあります。

声かけと指示を出し続け、全員が集合してから活動を始めようとして、かえって待っている子どもを延々と待たせてしまうということをやめなければなりません。

活動を通じて子どもを集めていくようにすると、「この活動の次は、〇〇」というように、子どもたちが次の段取りを予測して動けるようになっていきます。そのような学級集団に変えていくのです。

このようにすると、無用な指示や声かけも減り、待たされる時間も短くなり、結果としてクラスの刺激も整理され、活動が快適になってきます。

その都度指示を出し続けるクラスから、子どもたちが先を読みながら動けるクラスを目指したいものです。

実践のポイント

- ① 声かけや個別対応で子どもを集めるのではなく、活動で集める。
- ② 園児が「次はあの場所であの活動」と次の展開を読んで動ける活動の流れにする。
- ③ 不要な指示や説明は極力減らす。
- ④ 思いつきの説明はしない。
- ⑤ 思いつきのルールは出さない。

Q26 学級経営をチームで進めていく上で、配慮することはどのようなことですか。

支援員や加配教員等、複数の先生がクラスに配置されている場合には、明確な役割分担が必要です。

- ① 先生方が、バラバラに動かないこと。
- ② 先生方が、複数の刺激を同時に出し合わないこと
等がポイントです。

※ 参考文献 「発達障害の子がいる保育園での集団づくり、クラスづくり」 福岡 寿
エンパワメント研究所 発行 より

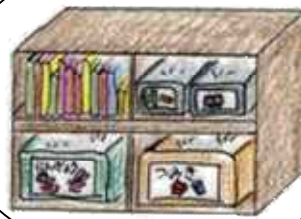
Q27

わかりやすい教室環境をつくるためには、どのようにしたらよいですか。

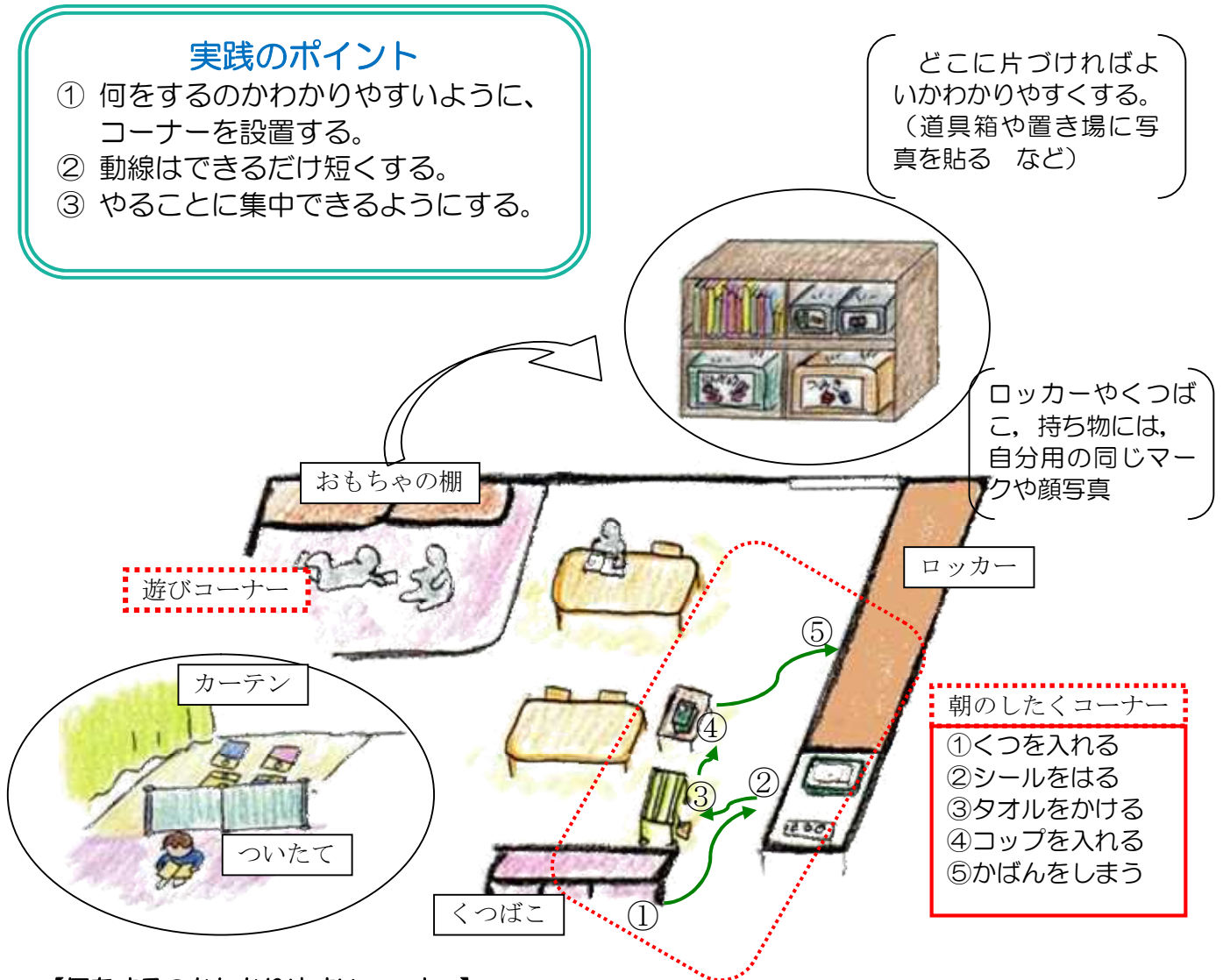
実践のポイント

- ① 何をするのかわかりやすいように、コーナーを設置する。
- ② 動線はできるだけ短くする。
- ③ やることに集中できるようにする。

どこに片づければよいかわかりやすくする。
(道具箱や置き場に写真を貼る など)



ロッカーやくつばこ、持ち物には、自分用の同じマークや顔写真を貼る



朝のしたくコーナー

- ① くつを入れる
- ② シールをはる
- ③ タオルをかける
- ④ コップを入れる
- ⑤ かばんをしまう

【何をするのかわかりやすいコーナー】

- 目的に応じてコーナーをつくる
(遊ぶコーナー、制作コーナー、ままごとコーナー、お昼寝コーナー など)
- 必要な物をまとめて配置する
(写真付きの道具箱、置き場に写真を貼っておく など)
- ついたてやカーテンでコーナーを仕切る
- ビニールテープの囲いや敷物で床上にコーナーを分けて示す
- 移動可能なキャスター付き家具やついたてで、目的に合わせてコーナーを変化させる

【動線をできるだけ短く】

- 近くにまとめて移動距離をできるだけ短く。
- 一連の活動は順序を示す。
 - ・ 活動を行う順に物を配置する
 - ・ 手順書やスケジュールを提示する

【やることに集中できるように】

- 視野に余分な刺激が入らないように。
 - ・ ついたてやカーテンで遮る
 - ・ 壁側に向いて行えるよう配置
- 付き添う。
 - ・ 必要に応じて声かけや視覚提示をする
 - ・ 子どもの視野を遮るようにして座る、立つ

Q28

子どもへの指示の出し方は、どのようにしたらよいですか。

実践のポイント

- ① 指示者に注意を向けさせる
- ② その子どもにわかりやすく伝える

指示がわかると見通しが持てて、切りかえやすくもなります。

子どもの様子をよく観察しましょう。

- ① 指示を見てる？ 聞いている？
- ② その伝え方でわかる？

指示はわかるのにやれない子
切りかえられないのかな？
我慢できないのかな？
苦手なのかな？

まずは、子どもに指示を受け取ろうとする構えができていくことが大切です。

音（拍手や鐘、名前を呼び）や視覚刺激（手を振る、目立つ物を見せる）、で耳や目の注意を向けさせます。

必要ならば、手をにぎる、肩に触れる、名前を呼ぶなどして、注意を向け続けさせます。集合する時に先生のすぐ近くにいれば、働きかけやすいです。

指示を聞く構えができたなら、子どもの理解に応じて「短いことばでわかりやすく」、ことばの理解が苦手な子どもには「視覚的にわかりやすく」示しましょう。

全体指示で理解しきれない時には、あとから個別に伝えます。その時は刺激の少ない落ち着いた場所で伝えるとよいです。



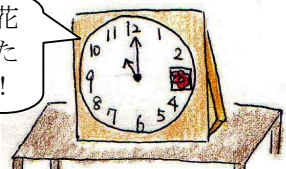
終わりだ！
次はおべんとうだ！

〇〇ちゃんも聞いてね！



決まった曲で片づけを知らせる

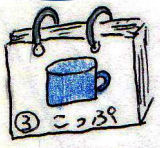
長い針がお花のところに来たらおしまいね！



時計にしるしをつける

マジックテープや磁石

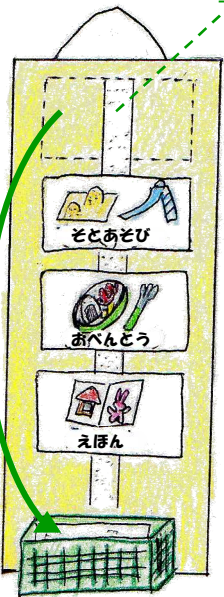
一枚ずつ



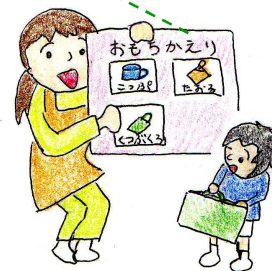
順に並べて示す



行う順序を示す



終わったら取り去る



全体指示のあとに個別に指示する

=コラム=

視覚情報の理解は、
実物→写真→絵や図→文字

の順ですすみます。その子どもの視覚的理解の段階に応じて、わかりやすい情報で示すことが大切です。

身振り手振り、やって見せること、色分けすることなども視覚支援です。

Q29

学級のルールづくりは、どのようにしたらよいですか。

実践のポイント (これだけは・落とさないように！)

- ①ルールは少なく
- ②わかりやすく（視覚的・具体的）
- ③ルールが守れたらメリットがあるという仕組み作り（肯定的）

1. ルールは少なく

子どもの年齢が上がってくると、学級で守ってほしいルールも増えてくるかもしれませんが、多すぎるルールは窮屈ですし、守れないと注意をされる機会も増えてしまいます。ルールは基本的なものだけにして、のびのびと生活できるようにしたいものです。

新しく覚えてほしいルールは一つだけにして、それを重点的に子どもたちに伝え、それができるようになったら新しいルールを追加する方が、子どもにとってもルールを早く覚えられるのではないのでしょうか。

2. わかりやすく（視覚的・具体的）

私たちの暮らす社会では、ルールが明示されていることはあまり多くありません。しかし、暗黙の了解や不文律は、子どもたちにとってとてもわかりにくいものです。子どもの年齢や発達段階に応じて、写真や絵、文字などでルールを示し、教室の見やすいところに掲示しておくとういでしょう。その際、良い例と悪い例を両方示すと、ポイントがわかりやすくなります。

文字で書く場合は、「～してはいけません」「～しない」という表現を避け、「～しましょう」「～する」という表現にし、形容詞ではなく動詞を用いると、子どもたちにとって何をしたらよいか明確になります。

3. ルールが守れたらメリットがあるという仕組み作り（肯定的）

“ルールが守れなければ注意される”という生活は、大人の私たちでさえストレスに感じます。まして子どもたちにとってはなおさらです。子どもたちはやがて、「ルール」という言葉を聞くだけで注意されることを連想し、ルールを嫌がるようになるかもしれません。

ルールとは本来、みんなが気持ちよく過ごすためのものです。“ルールを守ることで楽しく遊べた”という経験を積み重ねることで、子どもたちは自発的にルールを守るようになります。年齢が幼い場合は、“ルールを守ることで楽しく遊べた”というつながりを実感することが難しいので、先生が「～が守れて偉かったね」、「おもちゃを貸してあげたらAちゃんも喜んでるね」などと伝えることで、ルールを守ることを少しずつ理解してもらおうようにします。

どのようなルールを作るかということも大切ですが、ルールや約束を守れたら子どもにとってメリットがある、という肯定的な仕組み作りがとても重要です。

Q30

子ども集団とよりよい関係を結ぶためには、どのようにしたらよいですか。

実践のポイント

(これだけは・落とさないように！)

大人への信頼関係を築くことを目標に、園全体で話し合い、取り組み方や対応を決める。

- ① 子どもの気持ち、行動の背景を情報交換し共通理解に努める。
- ② 「話し合う場」と「話しやすさ」の両方をつくり、一貫性のある対応をする。



- ① 子どもは、先生の態度を学びます。
「笑顔」「やさしい、温かな口調」「増やしたい言葉や態度」を互いに点検し合い、園全体で実践します。



- ② 配慮したら困ったことが減った、手を貸したらできるようになった、こういうふうになるとよかった、失敗だった・・・などの評価や経験を園全体で情報交換します。

- ③ 他の子どもに無理があってははいけません。どの子どもにも納得できる対応に努めます。誰もが同じように認められていると感じているか、チームで子どもたちの様子を確認します。

- ④ 保護者への理解に努めます。全体の保護者へ話するとき、園長は、その時々、園の取組、どの子どもも共に育ち合うことの大切さを伝えます。

Q31

行事・イベントを進めていく上で、どのようなことに配慮すればよいですか。

実践のポイント

(これだけは・落とさないように！)

行事・イベントは、通常の学習より困難さが増すことを共通理解し、計画的に取り組む。

- ① 無理なくやれることを、スモールステップで。勝敗以外の価値観を育てる。
- ② 「一人一人違っていい」「みんなで作る」・・・「共生のスピリット」を浸透させる機会とする。



・行事イベントのむずかしさ

学習の場	いつもの教室と違って、園庭、ホールなど広いところでの学習が多くなり、場の変更・移動も度重なります。
大きな集団学習	いつもより、大きな集団学習になり、人のかかわりや刺激が多くなります。

・周りの人も余裕がなくなる

先生	時間や全体計画にとらわれて、気持ちに余裕がなくなり細かな配慮がしにくくなります。
友だち	いつも優しい友だちも、自分のことで精いっぱいになりがちです。
補助者	いつもよりうまく補助できず、自信を無くしたり、わがままに感じたりします。
保護者	目立った行動がないか、周りにどう思われるか緊張しています。

- ・ 行事やイベントの前に、園内で状況を共通理解しておく。
- ・ 職員自身が、柔らかいことばで、ほっとできる時間を確保する。
- ・ 目立たない参加の仕方や、手助けできる位置などを話しあう。

Q32

わかりやすい園環境をつくるためには、どのようにしたらよいですか。

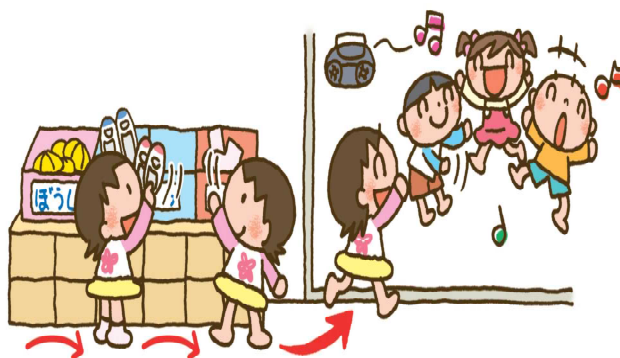
実践のポイント
(これだけは・落とさないように！)

「困っている子」にわかりやすい環境をつくることは、「どの子」にもわかりやすい園環境になるのだという共通認識を園全体で持つようにします。

- ①見通しが持てるように、具体的にわかるような絵や表に表す。
- ②落ち着ける場も用意する（周りの刺激を調節できる）。

誰もが整理しやすいので、次の活動へスムーズに進みます。

見通しがわかり、次の行動が具体的にイメージできると、「今」のことに集中できます。これは、どの子にとっても有効です。



ちょうど良い刺激の場所で落ち着いて同じ課題に取り組むことができます。
個々の困った状態を、的確に把握して、選択の幅を広く用意します。

Q33

園のルールづくりは、どのようにしたらよいですか。

実践のポイント

(これだけは・落とさないように!)

ルールはお互いが安全に楽しく生活できるために必要なものです。

ただし、「叱る」ためのルールではなく、「できたことを喜べる」ように・・・

- ① ルールは、叱ったり注意したりするためのものではありません。
- ② できているところや、努力しているところがわかるように活用します。

決めたルールが守れるように、対応に一貫性を持たせます。 個別の指導計画、個別の教育支援計画で評価します。



<順番>

ルールは、「わかりやすく」「誰もが納得」できるようにします



- ・「結果」よりも「努力」
 - ・「勝敗」よりも「協力」「認め合い」
- 拍手は大切です。

みんなが参加しやすいようにルールを変えることも大切です。



一日の生活の中では、
どのようなことに配慮すれば
よいでしょうか。



1日の予定を、
絵カードで示し、
わかりやすくして
います。

Q34

子どもたちを園に迎える際には、どのようなことに配慮すればよいですか。

子どもの様子や健康状態（睡眠・食事・
服薬・体温・トイレなど）を把握すること
に努めます。

その日の活動や帰りについて予告した
り、朝の支度にスムーズに移れるように声
をかけたり手順表を示したりします。

実践のポイント (これだけは・落とさないように！)

登園した子どもの気持ちに寄り
添うような声かけをします。

その日の活動を楽しみにして、
1日が気持ち良くスタートできる
よう支援します。



Q35

連絡帳を書く際には、どのようなことに配慮すればよいですか。

実践のポイント (これだけは・落とさないように！)

園で困っていることだけを伝
えるのは避けます。

子どもの成長を喜ぶこと・困っ
ていることの両方を、園と家庭と
で共有できるようにします。

保護者からの書き込みに必ず目を通し、
返信すべきことがあれば、答えて書くよう
にします。家庭での子どもの様子や園への
意見等は、職員間で共有するようにします。

園での出来事や様子の中で、できるよう
になったことやがんばっていることを、で
きるだけ伝えるようにします。困っている
ことについては、考えられる理由や対応に
ついて具体的に伝えるようにします。

Q36

「食事タイム」の時には、どのようなことに配慮すればよいですか。

好き嫌いの状況や感覚の敏感さの有無を把握しておきます。苦手なものを「減らしてください」「いりません」など上手に残す方法を教えます。また、好きなもの前に、ごく少量チャレンジするなどの食べるきっかけづくりをしてみます。

食事に集中しにくい場合には、人の動きが気になりにくいように、座席の向きや場所を配慮します。

実践のポイント

(これだけは・落とさないように！)

子どもにとって、食事が楽しい時間になるように工夫することが大切です。無理強いや、食べ方の指導ばかりにならないよう、楽しい雰囲気づくりにも心がけていいですね。

Q37

「お昼寝タイム」の時には、どのようなことに配慮すればよいですか。

実践のポイント

(これだけは・落とさないように！)

お昼寝が苦手な原因を考えます。感覚が敏感で、暗くなったり静かすぎたりすることが苦手な子ども、布団の感触が異なることが気になる子どももいます。それぞれの理由に合った対応をします。

持っていると安心して寝られるようなものを借りておくとうい子どももいます。

皆と一緒に寝ることが難しい場合には、一定時間を布団の中で過ごしたら、別室で静かに遊ぶなど、代わりになるような過ごし方を提案します。

寝た時刻や起きた時刻、普段の睡眠時間など、子どもの生活リズムについて保護者と話し合い、安定した生活習慣を作っていくことも必要です。

Q38

子どもたちを家に帰す際には、どのようなことに配慮すればよいですか。

その日の、楽しかったこと、子どもの良かったところ、がんばったことを伝えて、ほめます。

次の日の活動について予告します。活動に関係する道具を実際に見せながら話したり、絵や写真カードの予定表を示したりして、具体的にイメージできるように話します。

実践のポイント

(これだけは・落とさないように！)

その日の活動を振り返り、子どもの気持ちに寄り添うような声かけをします。子どもが次の日の活動を楽しみにして、「また来たい！またやりたい！」と思えるように支援します。